

## — 学 会 録 事 —

## 1. 日本藻類学会第17回大会

1993年3月30日・31日の両日、東海大学海洋学部8号館において第17回大会を開催した。大会会長は山田信夫氏（東海大学）で、参加者は131名であった。講演は60題の一般講演（うち展示講演11題）があった。

大会第1日目に同会場において「日本藻類学会誌の改革について」の討論会が2時間にわたって行われた後、引き続き同大学4号館で懇親会を開催した。懇親会は林田文郎氏（東海大学）の司会により、山田信夫大会会長の挨拶、有賀祐勝学会長の乾杯の音頭で始まり、109名という多数の参加で、盛会裡に終了した。第2日目には総会が開催された。東海大学の本会関係者ならびに学生諸君には大会運営にあたっていろいろご協力頂き、厚くお礼申し上げます。

懇親会参加者：

安井 肇・秋岡英承・川嶋昭二・坂西芳彦・吉田忠生・斎藤 譲・小河久朗・斎藤捷一・谷口和也・山本弘敏・有賀祐勝・石川依久子・出井雅彦・岡崎恵視・加崎英男・片平幸枝・片山舒康・北山太樹・小林 弘・須田彰一郎・高原隆明・高村典子・立沢秀高・宮地和幸・宮村新一・山本鎔子・吉崎 誠・吉武佐紀子・渡辺 信・綿貫知彦・澤田 威・鈴木章方・藤田大介・堀口健雄・横浜康継・鯉坂哲朗・川井浩史・喜田和四郎・清沢桂太郎・瀬戸良三・半田信司・村瀬 昇・大野正夫・奥田一雄・宝諸武士・当真 武・田中次郎・千原光雄・長島秀行・野崎久義・能登谷正浩・原 慶明・山崎嘉也・三浦昭雄・梶田泰司・栗本なるみ・竹下俊治・日野修次・藩野恭子・前川行幸・湯澤 篤・藤森 泰・真山茂樹・山田信夫・林田文郎・嵯峨直恒・金井塚恭裕・申 宗岩・浪岡日左雄・飯間雅文・御園生 拓・佐藤博雄・種倉俊之・細田 節・大竹敏博・中嶋 泰・吉永一男・中山 恭・山中良一・二宮早由子・平井真一・恵良田眞由美・山岸高旺・四ツ倉典滋・相馬咲子・石田健一郎・杉山孝一・中山 剛・二羽恭介・原田美穂・本多大輔・松村元美・松山和世・神谷充伸・土井考爾・駒崎 健・長嶋美香子・神林友広・鷹取 信・久保文靖・清水陽子・飯田高明・大西綾美・芹沢如比古・田井野清也・富永春江・Anong Chirapart・Danilo Largo・Jacqueline Rebello。

## 2. 編集委員会・評議員会

第17回大会の前日、3月29日に東海大学海洋学部1号館会議室において編集委員会および評議員会を開催した。評議員会では1993年度総会に提出する報告事項・議題などの審議を行った。審議の内容については総会の項を参照されたい。

編集委員会出席者：有賀祐勝、石川依久子、小林弘、前川行幸、川井浩史、吉田忠生、岡崎恵視、大野正夫、加藤哲也、都筑幹夫、渡辺 信、喜田和四郎、片山舒康、真山茂樹。

評議員会出席者：有賀祐勝、石川依久子、喜田和四郎、大野正夫、田中次郎、谷口和也、原 慶明、岡崎恵視、鯉坂哲朗、吉田忠生、山本弘敏、能登谷正浩、佐藤博雄。

## 3. 1993年度総会

1993年3月31日（大会第2日目）の講演終了後、東海大学海洋学部8号館において総会を開催した。有賀祐勝学会長の挨拶に続いて、横浜康継氏を議長に選出して議事に入った。

## I. 報告事項

## 1. 庶務関係

(1) 会員状況（1993年3月現在）：名誉会員3名、普通会员539名、学生会員57名、団体会員47名、賛助会員11名、外国会員105名、購読50件、寄贈・交換27件。(2) 1992年度文部省科学研究費刊行助成金「研究成果公開促進費」交付額は970千円で、責任頁は360頁である。なお、1993年度については補助要求額2,722千円、責任頁360頁を申請した。(3) 第16回大会を1992年3月30・31日に東京水産大学で開催した。(4) ワークショップ「海苔栽培業見学会」を1992年3月27・28日に千葉県にて実施した（藻類40巻2号を参照）。(5) 1992年度秋季シンポジウムを1992年9月16日に帝塚山短期大学で「藻類の遺伝学」をテーマに開催した（藻類40巻4号参照）。(6) 第2回日本藻類学会賞は井上 勲・原慶明・千原光雄の3氏に授与されることになった。対象論文は39巻4号掲載の Further observations on *Olisthodiscus luteus* (Raphidophyceae, Chromophyta): the flagellar apparatus ultrastructure である。

## 2. 会計関係

(1) 12月31日現在の1992年度の会費納入率は、普通会員92%、学生会員83%、賛助会員82%、団体会員52%、外国会員58%である。(2) 1992年度一般会計と同山田幸男博士記念事業基金特別会計の決算は、片山舒康(東京学芸大学)、市村輝宜(東京大学)の両会計監事により1993年3月10日監査が行われ、適正であると承認された。

## 3. 編集関係

(1) 1992年度に発行した「藻類」第40巻第1～4号は、総頁数432頁、掲載論文数28編(内、英論文25編、和論文3編)、短報13編(内、英短報10編、和短報3編)、総説1編、雑録25編であった。頁当たりの平均経費は11,330円であった。掲載論文の超過頁は56頁であった。(2) 1993年3月10日に発行した第41巻第1号は、掲載論文数4編(内、英論文4編、和論文0編)、短報3編(内、英短報1編、和短報2編)、総説0編、雑録6編で、98頁であった。(3) 1993年3月28日現在の論文投稿状況は、受理済み3編、却下1編、期限切れ2編、著者取消5編、著者改訂依頼中15編、審査中13編である。

## II. 審議事項

### 1. 庶務関係

以下のことが審議され、承認された。(1)「藻類」第41巻第1～4号を発行する。(2) 会員名簿を発行する。(3) 学会賞を授与する。(4) 秋季シンポジウムとし

て、海苔シンポジウム：海苔の機能性をめぐる諸問題(仮題)(1993年10月29日 東京)を開催する。(5) 日本藻類学会第18回大会を富山大学で、富山地域の会員のお世話で開催してもらうよう計画を進める。(6) つくば国際藻類フォーラム「藻類研究の今日と展望(Phycological Sciences ~ Today and Tomorrow)」(1993年8月23～26日 筑波)を後援する。

## 2. 会計関係

(1) 1992年度一般会計の決算報告および同監査報告は表-1のとおり承認された。(2) 1992年度山田幸男博士記念事業特別会計の決算報告および同監査報告は表-2のとおり承認された。(3) 1993年度一般会計および山田幸男博士記念事業特別会計の予算は表-3のとおり承認された。

## 3. 監事選出および評議員交代

1993-1994年の監事として大森正之氏(東大教養学部)と都築幹夫氏(東大応微研)を選出した。また、中国・四国地区評議員月舘潤一氏の転出に伴い、秋山優氏を繰り上げることにした。

## 4. その他

(1) 学会誌改革ワーキンググループ(委員長：石川依久子)から提出された最終答申(本号 p. 180～181 参照)の改革案について説明があり、審議の結果その大筋が承認され、今後は実施上の具体的事項の検討を行うことになった。(2)「藻類」の寄贈依頼2件について審議が行われ、承認された。

表-1 1992年度一般会計決算 (92.1.1 - 92.12.31)

収入の部 (円)		支出の部 (円)	
会費	5,020,904	印刷費	5,531,658
〔普通会員〕	3,636,000	〔印刷代〕	4,894,560
〔学生会員〕	225,000	〔別刷代〕	637,098
〔外国会員〕	474,904	編集費	338,416
〔団体会員〕	465,000	〔英文校閲料〕	100,000
〔賛助会員〕	220,000	〔編集補助費〕	50,000
販売	1,052,700	〔通信連絡費〕	160,464
〔定期購読〕	899,400	〔事務用品費〕	27,952
〔バックナンバー〕	153,300	会誌発送費	394,748
別刷代	715,400	庶務費	844,118
超過頁負担金	672,000	〔事務用品費〕	0
広告代	180,000	〔会議費〕	0
受取利息	68,100	〔通信・印刷費〕	383,788
プログラム代	36,560	〔事務整理補助費〕	4,000
文部省刊行助成金	970,000	〔幹事旅費補助〕	0
雑収入	12,360	〔幹事手当〕	160,000
寄付金	10,000	〔諸雑費〕	296,330
		事務業務委託費	1,483,200
		第16回大会補助費	120,000
		秋季シンポジウム会場費	50,000
小計	8,738,024	小計	8,762,140
前年度繰越金	5,899,334	次年度繰越金	5,875,218
合計	14,637,358	合計	14,637,358

## 貸借対照表 (92.12.31 現在)

借方 (円)		貸方 (円)	
定期預金 (第一勧業銀行)	1,000,000	未払金	2,196,322
普通預金 (第一勧業銀行)	4,128,828	前受会費	264,000
普通預金 (住友銀行)	51,220	前期繰越金	5,899,334
〔本部〕	51,220	当期剰余金	△24,116
普通預金 (山梨中央銀行)	68,979	次期繰越金	5,875,218
〔編集室〕	68,979		
郵便振替貯金	1,266,166		
小口現金	246,783		
〔事務局〕	162,893		
〔本部〕	83,890		
受取小切手	204,986		
カード	58,880		
〔UCカード〕	58,880		
〔アメリカンエクスプレス〕	0		
未収金	1,180,820		
*仮払金	128,878		
合計	8,335,540	合計	8,335,540

\*第17回大会補助費前払い及び山田基金支払立替え分 (賞状代)

1993年3月10日

会長 有賀 祐勝 ㊟  
会計幹事 能登谷 正浩 ㊟

本会計決算報告は適正である事を認める。

1993年3月10日

会計監事 市村 輝宜 ㊟  
会計監事 片山 舒康 ㊟

表-2 1992年度山田幸男博士記念事業特別基金会計決算 (92.1.1 - 92.12.31)

収 入 の 部 (円)		支 出 の 部 (円)	
山田追悼号売上金	7,000	賞 状 代	8,569
(内 未収金	7,000)	送金手数料	309
コンプ類売上金	1,000	小切手換金手数料	1,000
受 取 利 息	108,930		
小 計	116,930	小 計	9,878
前年度繰越金	2,189,543	次年度繰越金	2,296,595
合 計	2,306,473	合 計	2,306,473

## 貸借対照表 (92.12.31現在)

借 方 (円)		貸 方 (円)	
定期預金 (住友銀行)	1,900,000	未 払 金	8,878
普通預金 (住友銀行)	384,473	前期繰越金	2,189,543
現 金	1,000	当期剰余金	107,052
郵便振替貯金	13,000		
未収金	7,000	次期繰越金	2,296,595
合 計	2,305,473	合 計	2,305,473

1993年3月10日

会 長 有 賀 祐 勝 ㊤

会計幹事 能登谷 正 浩 ㊤

本会計決算報告は適正である事を認める。

1993年3月10日

会計監事 市 村 輝 宜 ㊤

会計監事 片 山 舒 康 ㊤

## 日本藻類学会第17回大会決算報告

1993年4月13日

収 入 (円)		支 出 (円)	
大会参加費	490,000	人件費 (アルバイト賃など)	432,000
普通会員	4,000×97人=388,000	プログラム印刷費 (150部)	30,940
学生会員	3,000×34人=102,000	消耗品費 (文具・立看板など)	72,469
懇親会費	327,000	茶・菓子代	21,423
大会補助費	120,000	懇親会費	339,000
		会 議 費	35,399
		通 信 費	5,769
合 計	937,000	合 計	937,000

表-3 1993年度一般会計予算

収入の部 (円)		支出の部 (円)	
会費	4,743,000	印刷費	5,412,000
普通会員	3,208,000	印刷代(400頁)	4,622,000
学生会員	243,000	別刷代	790,000
外国会員	625,000	編集費	407,000
団体会員	480,000	英文校閲料	100,000
賛助会員	187,000	編集補助費	50,000
販売	777,000	通信連絡費	222,000
定期購読	677,000	事務用品費	35,000
バックナンバー	100,000	会誌発送費	358,000
別刷代	790,000	庶務費	860,000
超過頁負担金	200,000	事務用品費	20,000
広告代	180,000	会議費	60,000
受取利息	50,000	通信・印刷費	467,000
プログラム代	30,000	事務整理補助費	0
雑収入	10,000	諸雑費	100,000
刊行助成金	970,000	幹事旅費補助	53,000
寄付金	1,000	幹事手当	160,000
		学会業務委託費	1,483,000
		名簿代	227,000
		第17回大会補助費	120,000
		秋季シンポジウム会場費	50,000
小計	7,751,000	小計	8,917,000
前年度繰越金	5,875,218	予備費	4,709,218
合計	13,626,218	合計	13,626,218

1993年度山田幸男博士記念事業特別基金会計予算

収入の部 (円)		支出の部 (円)	
山田追悼号売上金	7,000	学会賞	20,000
コンプ類売上金	1,000		
日米セミナー売上金	4,000		
受取利息	50,000		
小計	62,000	小計	20,000
前年度繰越金	2,296,595	予備費	2,338,595
合計	2,358,595	合計	2,358,595

1993年3月30日

## ワーキンググループ委員の構成

委員長：石川依久子（東京学芸大学）

幹事：原慶明（筑波大学），増田道夫（北海道大学），渡辺信（国立環境研究所）

出版社渉外班：野崎久義（国立環境研究所），井上勲（筑波大学），川井浩史（神戸大学），田中次郎（国立科学博物館），真山茂樹（東京学芸大学）

外国渉外班：川井浩史（神戸大学），鯉坂哲朗（京都大学），堀口健雄（信州大学）

和文誌検討班：藤田大介（富山県水産試験場），岡崎恵視（東京学芸大学），前川行幸（三重大学），須田彰一郎（日本ロシヤ株式会社）

本ワーキンググループは1992年3月の日本藻類学会大会の総会決議を受けて発足し、以来3つの班で検討を続けるほか、4回の全体会議を行い、さらに検討を重ねてきた。この間「藻類」40巻4号にその中間答申を掲載し、またその答申に基づくアンケート調査を行い、その結果について「藻類」41巻1号に報告した。これらの結果を踏まえて、ここに日本藻類学会誌改革について最終答申を行う。

本ワーキンググループはまず渡辺・井上両評議員の提案書の指摘にある「藻類」の現状に関する問題点につき再検討し以下の認識にいたった。

## 1) 「藻類」の現状における問題点

- \* 学術雑誌としての評価をおこなううえで、掲載された論文の引用、別刷りの請求などが一つの評価の基準となるが、現状ではその数は非常に少なくなっている。その理由の1つとして外国会員が少なく、特に図書館などで購読が少ないため「藻類」に掲載された論文が、そもそも外国の研究者の目にとまる機会が少ないことがあげられる。
- \* 外国会員の数は現在100名程度であり、真の国際誌と呼ぶには全体の会員数（約750名）から考えてあまりにも少い。特に外国を含む購読は50件程度と非常に少ないうえ現在はさらに減少傾向にある。外国の会員が少ない理由としては、円高のためあって藻類学関係の他の学会の会費と比べて日本藻類学会の会費が高いこと、「藻類」では英文と和文が混在しているため雑誌としてのレベルも実状以下にみられ購読意欲をそそられないこと、大会参加などのメリットがないことなどが考えられる。今日 J. Phycology や Phycologia などの雑誌が年6回の刊行となり、また掲載される論文の量も増えていることをふまえると、今後「藻類」

とこれらの国際誌との格差がますます開いていくものと予想される。

- \* 最近では Current Contents などの抄録誌や学術データベースが情報の検索に大きな役割をはたしている。また、これらのデータベースに基づき調査される論文引用数 (Citation index) がそれぞれの論文の学術的な評価を行う上で大きな要素となってきた。しかしながら、現在「藻類」は主な抄録誌に掲載されておらず、現状のままでは今後も掲載される可能性が非常に低い。このことは「藻類」に掲載される論文の評価のみならず「藻類」への優れた論文の投稿意欲を著しく低める要因となっている。
  - \* 「藻類」における和文論文の比率が減少してきたが、それにとまって会員間の情報交換、啓蒙誌としての機能を果たしにくくなってきている。
  - \* 現状では投稿論文数が少ないため、学会誌としてのレベルの維持が困難な状況にあり、また経済的理由などから英語のチェックを十分におこなって英語論文をよりよいものとするにも困難がある。
  - \* 現在は論文の審査はほとんど国内で行っているため、必ずしもその投稿論文の内容に関する適当な専門家のところへ審査を依頼できるわけではない。そのため審査の内容が十分でない場合もあり、この点に関する不満もある。
  - \* 「藻類」における和文論文の比率が減少してきた。その理由の一つとしては英文・和文が混在していることにより、和文論文は英文論文に劣るという印象を与えていることが考えられる。
  - \* 地球環境問題やマリンバイオテクノロジー等がクローズアップされている現在、生物群としての藻類は今後有望な生物資源として、また生物の多様性といった観点からも、以前より大きな注目を集めている。これにとまない藻類学の領域や研究者の幅は国内でも拡大しているはずであるが、「藻類」はそのような国内需要に十分対応できていないと考えられる。
- 以上のことをまとめると、1) 外国会員・購読が少ない。海外への普及が悪いため論文の投稿数が少なく掲載論文の質が向上しない。その結果として外国会員・購読が伸びない。2) 和文論文数が急激に減少し、それにとまない、会員間の情報交換や啓蒙誌としての機能が果たせなくなり、国内の会員や購読も伸びない。この二重の悪循環を解決するためには、1) 雑誌の質を高められるよりよい編集体制の確立、2) 外国会員と購読（特に大学図書館などの公的機関）の拡大、3) 投稿論

文の量と分野の拡大および質の向上、4) 和文論文や国内会員間の情報交換および啓蒙活動の一層の充実、をめざした抜本的な改革が必要であるとの認識で一致し、これを中間答申にまとめた。

## 2) 「藻類」の改革案

中間答申を「藻類」40巻4号に掲載し、この内容に関して全会員を対象に雑誌の改革に関するアンケートを行った。その結果、多くの回答者が学会誌を英文誌と和文誌に分けることに賛成し、また英文誌については国際的な商業的出版社との契約のもとで出版することに賛成していた。さらに、雑誌の体裁・出版回数については英文誌 A4 版、年 4 回・和文誌 B5 版、年 2 回ないしは 4 回が多数を占めていた。

そこで本委員会はこのアンケート結果も踏まえて、学会誌の改革について討議を行い、次のような結論に達した。

### i) 英文誌

英文誌は編集の国際化、外国会員・購読の拡大をめざし、具体策として編集委員としての外国人会員の参画による学会誌の出版にふみきる。将来的には現在機運の高まっている太平洋西部地区での藻類学会連合などの設置と、この学会連合による共同編集・出版も考慮すべきである。

- \* 大学図書館などの購読の拡大を考えると、実績のある国際的商業出版社からの出版は非常に効果的である。このことには出版社のネームバリューに加えて出版社自身のプロモーションも期待できる。
- \* 英文の校閲、印刷スタイルの編集、英文の初期校正など日本人のスタッフだけでは困難な作業を国際的な出版社の編集スタッフが加わることで適切に行うことができるようになる。このことは雑誌の対外的な評価を高める上で大きな効果がある。
- \* 雑誌の体裁、契約内容、購読など非会員への販売数にもよるが出版社からの出版の方が学会からの出版より少ない経費ですむ可能性がある。この場合、雑誌の体裁を現状の B5 版から A4 版に拡大し、名称をより一般的なもの(地域名を含まないもの)に変更する。年 4 回各号 60-70 ページとし、用紙・印刷の質などは少なくとも現状を維持することを前提とする。
- \* 学会の主な動向につき掲載する。

### ii) 和文誌

- \* 和文誌は会員間の情報交換、啓蒙誌としての機能を充実させるため和文論文(英文要約をつける)のほか、速報、総説、口絵写真、解説(検索表)、採集地案内、採集記録、研究機関案内、関係論文リスト、学会記事、計報、会員短信などを掲載する。
- \* 編集体制は英文誌編集との重複を避け、現状程度の

規模で行うが、印刷の形態については経費削減のため、DTP(デスクトップパブリッシング)を導入し完全版下の作成をおこなう。

- \* 雑誌の名称は「藻類」を継承し、体裁は現状のまま B5 版とし、ニュースの速報性とこれまでの和文論文などの掲載頁数を維持・充実し年 3 回各号 64 ページ発行とする。

以上のことを踏まえ、国際的商業出版社 3 社および従来の中西印刷に経費について見積をさせた(出版社との契約条件と見積回答については資料参照のこと)。その結果、英文誌を Blackwell Scientific 社に、また和文誌を中西印刷に委託することで現状の会計規模で英文誌と和文誌を出版することが可能であると判断した。

### iii) 英文誌・和文誌分割後の編集体制

- \* 英文誌・和文誌編集のためにそれぞれの独立した編集局をつくる。
- \* 英文誌編集局は新体制が軌道にのるまで固定する。
- \* 英文誌編集局は会計上の問題を除き独立させる。
- \* それぞれの編集局の組織は下記のようにする。

#### 1) 英文誌

基本的に以下の体制とするが出版社とも協議のうえ決定する。

Editor-in-chief	1 名
Associate Editor	日本人 3 名、外国人 3 名
Managing Editor	1 名
Editorial Board	外国人を含む約 10 名

#### 2) 和文誌

基本的には従来の編集体制を踏襲する。

編集委員長	1 名
編集実行委員	2 名
編集幹事	1 名
編集委員	英文誌の日本人 Editorial Board が兼ねる。

#### iv) その他

- \* 出版助成金に関しては、文部省への打診の結果、1 学会で 1 機関誌のみ対象となる。名称の変更は可能であるので英文誌を対象に継続申請する。他の学会組織との共同出版となった場合には再申請ということになる可能性が高く、発行形態についてはさらに検討を要するが、出版社からの発行自体には問題はない。
- \* 外国会員には英文誌のみ受け取る制度を設け、会費を安くする。
- \* 英文誌、和文誌の分離にともなう経費の増大に対処するため、事務業務委託内容の見直し、賛助会員会費の見直し、オークション・講習会などの学会事業の展開を検討する。学会事業の展開は財政的なゆとりの有無だけでなく、学会活動の活性化にもつながるので積極的に進めるべきである。

— 会 員 移 動 —  
新 人 会

住 所 変 更



計 報

本会会員 豊国秀夫氏（長野県）は1992年9月26日に逝去されました。

本会会員 稲垣貫一氏（神奈川県）は1992年12月22日逝去されました。

本会会員 北見秀夫氏（新潟県）は1993年3月6日逝去されました。

謹んで哀悼の意を表します。

日本藻類学会

退 会